

国際協力の現場を見て、成果を確認 以後、継続して国際協力に従事

第11回「国際青年育成交流」事業ドミニカ共和国派遣
UNDPスーダン事務所 × 新屋 由美子



主な略歴

- 2004年 広島県尾道市出身
内閣府の航空機派遣事業に参加（ドミニカ共和国派遣）
- 2006年 （特活）JHP・学校をつくる会 カンボジア事務所・教育支援プロジェクトコーディネータに着任
- 2010年 内閣府・第22回世界青年の船事業のファシリテータとして乗船
- 2010年 青年海外協力隊（村落開発普及員）として、カメルーンで活動
- 2012年 英国・ブラッドフォード大学平和学部修士課程で学ぶ
- 2013年 UNICEFリベリア事務所教育セクションでインターン
- 2013年 UNDPスーダン事務所・機器予防・復興ユニットで国連ボランティアとして勤務

事業で得たことは何ですか？

私が本派遣事業に応募した時、ドミニカ共和国の隣国、ハイチで実施されているプロジェクトの後方支援をする、NGOでのインターンシップをしていました。また、それまでボランティアベースで国際協力活動に関わったことはありましたが、日本のODAが現地でもどのように活用されているか、JICAがどのような仕事をしているかを自分の目で見たことはありませんでした。ドミニカ共

和国への3週間の派遣期間中、ODAプロジェクト、JICA事務所、そして専門家や青年海外協力隊の活動現場を視察させていただくことができ、活動の成果や現場で努力されている方々の姿を自分の目で確認することができました。その経験は、国際協力に本腰を入れて関わる後押しをしてくれたのではないかと思います。

事業の経験は、その後の人生にどのような影響を与えましたか？

ドミニカ共和国より帰国後すぐに、日本のNGOへ就職しましたが、以後一貫して国際協力の仕事を続けています。航空機派遣事業に参加したことにより、内閣府の他事業の実施のお手伝いをさせていただく機会をいただいたことで、国内外に貴重なネットワークを築くことが出来ました。特に、第22回世界青年の船でファシリテータとして乗船し、「SWYファミリー」の一員になったことは大きな意味がありました。下船後、カメルーン、リベリア、スーダンとアフリカの国々で仕事をしたり、イギリスに留学したりしていますが、大抵どこに行っても必ずSWYファミリーとつながることができるのです。特に、一度世界青年の船事業に参加経験のあるカメルーンでは、現地の既参加青年組織とコンタクトを取り、一緒に活動



をしたり、仕事の助けになるような人脈を紹介してもらったりしました。同時に、仕事であれボランティアであれ、青少年の異文化交流に関わることが自分のライフワークになりつつあります。

これからやりたいことは何ですか？

今後も国際協力の仕事を出来る限り継続していきたいと考えています。大学以前より憧れていた国際公務員として、紛争後の国における開発に関わっていきたくと思っています。内閣府の事業のおかげで、世界中の人たちと交流を持つ機会を得て、地域を限定せず、世界中どこでも自分が役に立てる機会があるのであれば、仕事をしてみたいです。また、仕事であっても、個人のボランティア活動であっても、異文化を

理解を広めるための活動は継続していきたいと思っています。インターンをさせていただいたUNICEFや、現在勤務しているUNDPのプロジェクトでも、若者への教育やエンパワーメントは重要な活動の一つです。多様性を尊重し、コミュニティが持つ力を引き出すことにより開発を促し、平和を定着させるお手伝いができれば幸いです。

ヨルダンから未来へ

第18回「国際青年育成交流」事業ヨルダン派遣

システムエンジニア

×

石川祐実

事業で得たことは何ですか？



幼少期より母の仕事の影響で国際交流活動に親しみ、大学生活をフェアトレード活動や交換留学などで忙しく過ごしていた私は、「将来は国際協力の場で貢献したい」と希望に胸を膨らませて本事業に参加しました。

しかし、本事業で国際協力活動の現場を実際に見て、その難しさを痛感しました。まず、現地で行う活動の目的や意義を現地スタッフと共有することが困難で、職場に「日本からお手伝いさんが来た」と認識されてしまうなど、真に「協力」して活動することがいかに難しいことであるかを学びました。

また、街を歩いていて罵声を浴びせられるなど、アジア人女性への差別も経験しました。現地の協力隊員の方々は日々この差別に耐えながら職場に向かっていました。

本事業は国際協力活動が現地の問題解決の為のやりがいある仕事であり、歓迎される仕事であると疑わなかった私にとって衝撃的な経験でした。同時に強い意志がないと務まらない過酷な仕事だということを受け入れたうえで、私自身がこれからどのように国際社会に貢献していけるのかを模索するきっかけとなりました。

主な略歴

- 2008年 兵庫県出身
高知大学国際社会コミュニケーション学科入学
- 2009年 スウェーデン国立
イエテボリ大学に交換留学
社会福祉政策を専攻
- 2011年 内閣府国際青年育成交流事業に参加（ヨルダン派遣）
- 2013年 システムエンジニアとして
公共福祉事業のシステム開発に従事

事業の経験は、その後の人生にどのような影響を与えましたか？

大学で学んでいた社会福祉政策について、イスラム社会は社会福祉政策にどのような影響を与えるのか。この関心事項が、4か国あった派遣国の中でヨルダンを第一希望に申請した一番の理由です。

事業を通じてヨルダンでは障害者の方がイスラム教の宗教的解釈のもとに社会福祉システムにアクセスできない現状を知りました。このことがきっかけで、公平な社会福祉システムの実現には宗教、ジェンダー、民族性など社会的決定要因の研究が不可欠なのではないかと思い至りました。この気づきを得て、これからの人生を通じてこれを追及していきたいとの思いを強めました。

大学卒業後は公共福祉事業に参入しているIT企業に就職し、現在はシステム開発に従事する一方で関連する福祉の資格を取得しながら学びを深めています。

また、本事業で出会った素晴らしい派遣団との出会いもかけがえのないものです。今でも日常の忙しさに流されてしまいうようになる度に彼ら・彼女らとの交流が「私が本当にしたいことは何か」を再確認させてくれます。時には共に旅をしたり、時には共に何かに挑戦したりしながらこれからも共に成長しあえる関係を築いていきたいです。

これからやりたいことは何ですか？

これからやりたいことはまだ模索段階にありますが、近い将来健康や社会福祉システムへのアクセスにおける社会的決定要因を学び、研究することを始めたいと考えています。そのことが将来どのような形

であれ、全ての人々が健康で、社会福祉システムにアクセスできる社会づくりに役立てられればと思います。

これからも自分の役割を探し続けたい

第1回「国際青年育成交流」事業 ヨルダン派遣

一般財団法人 青少年国際交流推進センター 赤澤美雪



事業で得たことは何ですか？

最大の成果は、日本青年代表としての使命を与えられ、約1か月のプログラムへの参加経験をどのように社会で生かすかについて、現在までの約20年間考え、実践する機会を数多く得たことです。まずは自分が有能な人材になれるよう、国際交流、友好促進にとどまらず、柔軟な思考を持ち、貪欲に学ぶという姿勢でプログラムに臨みました。同じ目標を共有する団員と活動する中、自分が求めれば、得られる成果は無限大に広がっていくことを実感しました。事業参加直後は、その成果

は膨大で自分の中で消化し発展させるには、時間が必要だと感じましたが、事業参加経験を生かした活動が、30年前から先輩がされてきており環境が整っていたことが、さらに自分の活動の域を広げ、尊敬すべき人生の先輩に出会う機会になりました。社会人としての経験を積む中で、事業で得た成果を応用、発展させることができました。常に現在と未来の社会に広い視野で関心を持ち続け、今、自分にできることを実践していくことが、事業に参加した自分の果たす役割だと考えています。

事業の経験は、その後の人生にどのような影響を与えましたか？

まもなく社会人になろうとしていた時に、将来の展望を描き、たゆみない努力をしている同世代の仲間に出会えたことが、今、どのように生きるべきかについて多くの新しい視点を与えてくれました。当時は、バブル崩壊後の就職氷河期でしたが、国際交流事業参加者は、決まって、夢や希望を持ち、学校や課外活動に積極的で、良好な人間関係を築き、困難に思えた社会情勢を柔軟に受け止め、活路を見出していました。そのような環境の中、事業参加経験をいかし、参加者に無限の可能性を与えられる国際交流事業にプログラムコーディネ

ータとして長期的にかかることを志すようになったのは、自分にとって自然な流れでした。その夢はかない、主にアジアの国々との交流を担当するようになりましたが、高い目標をもった参加者に、質の良いプログラムを提供するためには、常に、幅広い分野の社会情勢に関し利を持ち、国内外の関係者との良好な人間関係が必要なので、自分自身の能力の向上が求められました。国際交流事業は、私の人生に、裁量の訓練の機会を与え続けてくれています。

主な略歴

- 神奈川県鎌倉市出身
- 1994年 内閣府 第1回「国際青年育成交流」事業(ヨルダン)参加青年
- 1996年 財団法人 青少年国際交流推進センター 勤務
- 2007年 日中青年世代友好代表団 中国行 団員 (中華全国青年連合会受入れ)

これからやりたいことは何ですか？

通訳案内士の資格と18年の国際交流プログラムコーディネータの経験をいかして、年々増加している訪日外国人旅行者に対し、日本の文化、歴史、産業や国民性等について理解をする機会を十分に提供し、親日家になってもらえることを目的とした組織をつくって活動をしたいと考えています。観光立国をめざし、2020年の東京オリンピック開催に向けて環境整備を促進し、

地域活性化を進め、日本人として誇りを持って生きることができる社会を築くことに、今後の自分の役割を見出し、力を尽くしていきたいです。



日中青年世代友好代表団で中国を訪問、プログラムに同行してくれた中国人学生と。

地球の反対側で学んだ ブラジル・日本両国の素晴らしさ

第6回「国際青年育成交流」事業ブラジル派遣

京都府警察

×

大橋 久美

事業で得たことは何ですか？

私はこの事業に参加して、今まで知らなかった世界について、また自分の母国日本について知ることとなった貴重な経験ができたと思います。

派遣中に5都市を訪問しましたが、ブラジルの文化、国民性、それに単なる観光では知ることができなかった、ブラジルの抱える問題を知ることができました。さらに、現地の日系人との交流等で、移民当時の苦労や、移住後の日系人の活躍を知ることができたことは貴重な経験となり視野が広がりました。

特にブラジルの抱える問題について身をもって体験できたことやブラジル人気質を知ることができたことは、仕事上でも大きく役立っています。また、自分たちの祖先がブラジルの開拓や成長に大きく影響していることを知り、改めて日本人の素晴らしさを知り、自分が日本人であることを誇りに思うようになりました。

派遣団で初めて知り合った団員とは友人の枠を超え兄弟同然の関係となり、この事業で得た貴重な財産となっています。

事業の経験は、その後の人生にどのような影響を与えましたか？

「Um real(1リアルちょうだい)」これは私がブラジル派遣中に、ファベラと呼ばれる貧民街にある学校で、3~4歳の女兒から言われた言葉です。ブラジルに貧民街があることは知識として知っていましたが、実際に女兒からこの一言を言われ、初めてブラジルにおけるファベラの問題について実感することとなり、「いつかブラジルの抱えるこういった問題に携わることができたら」、と思うようになりました。

帰国してからは、残念ながら未だブラジルのファベラ問題に携わることができていませんが、英語・ポルトガル語の勉強を続け、外国人観光客や日系ブラジル人の通訳、翻訳に従事するとともに、仕事を通じた国際交流団体の活動に取り組んでいます。

また、約3週間という長期に渡る派遣団メンバーとの団体生活では、他人に対する思い



やり、意見交換の重要性、協調性等が身につきましたし、その後の自分の生き方に大いに影響を与えています。派遣時に学生だったメンバーもいますが、それぞれがしっかりと自分の足で自分の道を歩み、悩んだときは良き友人としてアドバイスを、ある時はライバルとして切磋琢磨しています。

これからやりたいことは何ですか？

ブラジルは、今後のオリンピック開催予定地に決定し、現在主要都市の一部ですすでに取り入れられている日本の交番制度を、JICAの協力のもと全土に拡大予定であると聞いています。

今後は、JICAの専門家として、ブラジルでの交番制度拡大事業に携わり、警察官としての自分の経験や知識を生かして、

ブラジルの治安改善に貢献できたら、と思っています。また、日系ブラジル人を始めとする外国の方々を日本で安全に、安心して暮らせるよう、また、日本を旅行する海外からの旅行者のみなさんが安全に日本を観光できるよう、引き続き仕事でもプライベートでも活動していきたいと思っています。



主な略歴

京都府京都市出身

1995年 大学を卒業後、京都府警察官を拝命

1998年 大学科目履修生として、ブラジルポルトガル語学科でポルトガル語を習得

1999年 内閣府の航空機派遣事業に参加（ブラジル派遣）

英語及びポルトガル語（日系ブラジル人関連）の通訳・翻訳に従事

2013年 京都府警察地域部通信指令課にて勤務、英語を含む110番の受信・指令に従事

日本と中南米諸国との架け橋に 事業体験を活かした研究・教育生活

第14・18回「国際青年育成交流」事業ドミニカ共和国派遣

早稲田大学高等研究所 × 武田 和久



主な略歴

- 1977年11月 埼玉県生まれ
- 2006年3-6月 アメリカ、ジョン・カーター・ブラウン図書館で在外研究
- 2006年9月 上智大学博士（地域研究）
- 2007年9月 ドミニカ共和国派遣（団員）
- 2008年4月～2011年3月 日本学術振興会特別研究員（PD）
- 2010年3月～2011年3月 アルゼンチン国立サン・マルティン大学で在外研究
- 2011年9月 ドミニカ共和国派遣（副団長）
- 2012年2月～2014年2月 日本学術振興会海外特別研究員として、スペイン高等科学研究院イバナアメリカ研究部門で在外研究
- 2014年4月 早稲田大学高等研究所助教

事業で得たことは何ですか？

団体行動時の周囲に対する配慮と、日本国代表者としての公的な意識を自覚できた。派遣先では、大臣や副大統領など、個人レベルでは面会困難な方々と話せる機会を持てた。こうした方々は、私たち派遣団員を温かく迎えてくださり、国際社会で活躍するのに必要な知識と技量を身につける重要性を説いてくださり、大きな刺激となった。

派遣先のドミニカ共和国は、日系移民の歴史という際立つ特徴を持つ。戦後まもない日本から移住され、現在に至るまで異国の地で生活してこられた日本人の経験は、日本国で生まれ育った私たちにはすべてが驚きであり、彼らの不屈の魂を感じた。海外の日本人の相当数が中南米諸国にいますが、日本国内でこうした状況を知るには難しい。日本国の未来を考える時、海外の日本人との関係構築と協同は重要であり、彼らと出会うきっかけを与えてくれた日本派遣事業に感謝申し上げたい。

事業の経験は、その後の人生にどのような影響を与えましたか？

2007年度に団員として参加した時の本事業参加者は、いずれも自身の明確な意見や考えを持ち、それを他の人に積極的に伝えられる技能を持つ人々であった。こうした人々と時間を共有した経験は、現在、日本の大学で研究と教育に従事する私の仕事に役立っている。ディスカッション形式の授業では、本事業の経験を活かして、議論の進め方を学生に教授できた。また昨今の大学では、スタディーツアーをはじめ、学生の海外研修に引率者として同行するのが珍しくない。2011年度に副団長を務めた経験は、引率の疑似体験に相当し、引率のための事前研修的な役割を果たした。現在の私は中南米史を研究し、スペイン語や中南米諸国に関して大学で講義している。



ドミニカ共和国派遣の経験はこの仕事に直結している。スペインの海外植民の発端である同国の訪問、また日系人との交流は、中南米史の原点を訪れ、海外在住の日本人との関係構築の契機となった。

これからやりたいことは何ですか？

引き続き中南米史研究とスペイン語ならびに中南米諸国に関する授業という職務を継続し、海外在住の日本人との関係を取り結び、日本国の将来的な発展に微力ながら貢献したい。日本国が諸外国とのパートナーシップを作っていく際、日本から遠方にあたる中南米諸国に対しては、これまであまり注視されてこなかった。

しかし海外在住の日本人の相当数が中南米諸国で暮らすという現実を直視すれば、日本が同地域とのより良い関係を結んでいくことの重要性は必然的に理解される。日々の個人的な仕事がかような大きな国家レベルの問題につながっていくことを願っている。

ラトビアで見つけた本当の自分 コンプレックスを強みに

第19回「国際青年育成交流」事業 ラトビア共和国派遣

フォースバレー・コンシェルジュ株式会社×藤井佑香



主な略歴

広島県福山市 出身

2012年 内閣府の航空機派遣事業に参加（ラトビア共和国派遣）

2014年 国際基督教大学卒業後（文化人類学専攻）、フォースバレー・コンシェルジュ株式会社入社

現職では、日本企業への世界TOP大学の人材紹介、フランスのビジネススクールへの日本人リクルーティングに従事

事業で得たことは何ですか？

団長、副団長を含めた団員との出会いや、日本代表としての立ち振る舞いが学べたことなど、ラトビア共和国派遣を通して得たことは数え切れません。その中でも特に私にとって大きかったのは、自分のコンプレックスを強みに変えることが出来たことです。

派遣時に学生だった私は、帰国子女が多く通う大学に在籍していました。その様な環境では、英語が話せることや海外に居住経験があることは珍しくありませんでした。そのため、日本にしか住んだことが無く、英語

もネイティブには敵わない自分に強いコンプレックスを感じていたのです。しかしながら、派遣中に14年間習ってきた書道を披露したり、現地の人に日本文化について聞かれた際に、日本に長く住んでいたからこそ伝えられることが多くありました。

その時初めて、自分が大学で引け目を感じていたことが海外では強みにもなるのだと気付くことが出来たのです。自分に自信を持てたことが、事業参加の一番の収穫の一つだと思っています。

事業の経験は、その後の人生にどのような影響を与えましたか？

事業参加を通して、自分は日本が大好きなんだと気付けたことは、自分の将来を考える上で大きな軸となりました。派遣中は日本について聞かれる機会が非常に多かったのですが、多くの人に説明すればするほど、伝えたいことが溢れるほどあったのです。その時、「自分は本当に日本が好きなんだな」と気付き、これからも世界に日本を伝え続けたいと強く思うようになりました。

そして現在、私は世界中の優秀な人材を集め、日本企業に紹介する会社に勤めています。世界中でのリクルーティングは、世界で日本を紹介することに繋がっています。それを特に感じたのは、昨年、私の会社が主催したミャンマーでの「日本留学・就職フェア」に同行した時でした。日本での就職のチャンスがあることを伝えると同時に、日本



広島の母校での内閣府事業報告の様子

ほどの様な国かを伝えることも不可欠でした。事業の参加がなければこの様な進路選択は無かったであろうと心から言うことが出来ます。

これからやりたいことは何ですか？

ヨーロッパの大学院進学です。今は社会人になったばかりなので暫くは難しいのですが、いずれ実現したいと思っています。

ヨーロッパを進学希望先に選んだのも、初めて訪れたヨーロッパがラトビアだったからだと思います。様々な文化が共生し、豊かな文化がはぐくまれているヨーロッパの環境に強い魅力を感じた私は、ラトビア訪問後も頻りにヨーロッパへ足を運ぶ機会を設けるようになりました。

将来的には海外で働きたいとも考えていますが、まずは世界で通用出来る人材になるべく、現在の仕事に全力投球をするつもりです。今後も日本を代表する女性を目指し、日本を世界に発信し続けます。